

DIOCESE OF SAITAMA

TOKIWA 6-4-12, Urawa-ku,
SAITAMA city
〒330-0061, JAPAN
TEL:048-831-3150
FAX:048-824-3532



カトリックさいたま教区

さいたま市浦和区
常盤 6-4-12
〒330-0061
TEL:048-831-3150
FAX:048-824-3532

ねん きょうく しんねん
2026年 さいたま教区 新年のごあいさつ

へいわ つし ひと きょうこう じゅうよんせい
平和を告げ知らせる人になりましょう(教皇レオ十四世)

しんあい きょうだいしまい みな
親愛なる兄弟姉妹の皆さん

みな 皆さま一人ひとりにとって、2026年が素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。
しゅ 主イエスのご誕誕を祝ったのち、わたしたちは、神の母聖マリアの祝日と世界平和のための祈
りの日をもって新年を迎える。そして、極東にある日本は、他のすべての国々、大陸、島々よ
りも早く、新年の太陽を迎えた。キリスト者としてわたしたちは、2026年の新しい太陽に向
かって、83億人の大きな人類家族にいのちを与え、道を照らす光であるイエスと心を一つに
し、教皇レオ十四世の新年の初めの呼びかけを歓迎したいと思います。
しんねん はじ きょうこう じゅうよんせい しんねん はじ よ かんけい おも
新年の始まりに、教皇レオ十四世は、「平和の福音宣教者」となるよう呼びかけていま
す。平和が皆さんとともに。「非武装と軍縮の平和に向けて」。

きょうこう しゅうにん さいしょ しゆんかん ごご せい だいせいどう ちゅうおう はじ
教皇に就任した最初の瞬間、5月8日の午後、聖ペトロ大聖堂の中央バルコニーに初めて
すがた あらわ がつ にち そうごうてきにんげんかいはつしう はつびょう ねんせかひいわ
姿を現したときから、8月26日、総合的人間開発省によって、発表された2026年世界平和
ひ いた へいわ きょうこう じゅうよんせい こうどう きょうつう つづ
の日のテーマに至るまで、平和は教皇レオ十四世のことばと行動の共通テーマであり続けてい
ます。

しん へいわ う い
「真の平和を受け入れる」

このテーマに関するメッセージでは、教皇は、「人類が暴力と戦争の論理を拒絶し、愛と正義に
もとづく真の平和を受け入れるよう招いている」と述べられています。この平和とは、単に紛争がな
い状態ではなく、軍縮という選択肢であり、「つまり、恐れに基づかないのです」。
ぶ き ちんちく ぐんしゆく でんかん ふんそう かいじゅう こころ ひら しんらい
武器が沈黙するとき、「軍縮」へと転換することとなり、それは「紛争を解消し、心を開き、信頼、
きょうかん きぼう う だ おぞ ほと ふんそう よ かたち ぼうりょく きょぜつ い かた ぐげん か
共感、希望を生み出すことができる」からです。しかし、それを呼びかけるだけでは十分ではありません。「目に見えるものも構造的なものも、あらゆる形の暴力を拒絶する生き方へと具現化されなければなりません」。

「平和が皆さんとともに」。復活したキリストのあいさつからペトロの後継者のそれに至るまで、
まね しんじや ひしんじや せいじじどうしゃ しみん む ふへんてき かみ くに きず
この招きは、「信者、非信者、政治指導者、市民」に向けられた普遍的なものであり、「神の国を築
にんげん へいわ みらい けんせつ ねつれつ がんぼう こ

レオ十四世の言葉によれば、平和というテーマは、その傷跡がまだ癒えていない現在の状況から決して切り離すことはできません。「私たちの世界は、紛争、不平等、環境破壊、さらにいや増す精神的孤立感という深い傷跡を背負っています」と、1925年に開かれた「エキュメニカル集会」の100周年を記念する、ストックホルムでの「エキュメニカル週間」に参加した人々に向けて、教皇は最近こう述べました。

ヴェローナの「平和の広場」を生み出した運動体や諸団体に向けた講話の中で述べたように、和解は「現実」つまり地域や共同体から生まれ、地元の諸機関ではぐくまれていくものです。「相違」や「対立」を否定するのではなく、それらを認め、受容し、乗り越えていくのです。

「平和を望むなら、平和の諸機関を整えよ」

しかし、痛みが優勢に見える場所では、より大きな責任、すなわち和解の明日を築く責任が生じます。それは、現状維持の慣性を打ち破る衝撃を要とする、現代世界における一つの逆説です。ラテン人が「*Si vis pacem, para bellum*（平和を望むなら、戦争の準備をせよ）」と述べたのに対し、レオ十四世は、「平和を望むなら、平和の諸機関を整えよ」と力強く主張しています。それは上からのみならず、「下から、すべての人々と対話しながら」行わなければなりません。平和を築くための普遍的な条件は、依然として一つです。「ゆるしなしでは、決して平和は訪れない」と、去る8月20日の一般謁見で、ポルトガルに古くからのルーツをもつ信者たちに語りました。

「私たちは世界平和を待望します」

こうした力強い姿勢をもって、平和は「世の光」となります。「すべての人」が平和を求めますが、とりわけ、未来を生きる若者たちはその必要性を強く感じています。トル・ヴェルガータで開催された、若者たちの祝祭（ジュビリー）の前夜祭で、教皇は「正義と平和のあかし人となる福音の宣教者を、世界はどれほど必要としていることか」と語りました。

そして、しばしば忘れられがちな、単純な道を、彼らに示しました。「友情は、真に世界を変えることができます。友情は、平和への道なのです」。そして、聖年行事のミサのためにサンピエトロ広場に集まった若者たちに、天を貫き、記憶に刻まれるであろう叫びを託しました。「私たちは世界平和を待望します」。

主イエスと聖母マリアが、この新しい一年を通して私たちに寄り添ってくださいますように。そうして、私たち一人ひとりが、より兄弟愛に満ちた社会の建設者となり、とりわけ主イエスの弟子として、互いに神の愛を証しする者となりますように。

父と子と聖霊のみ名によって。アーメン。

2026年元旦 神の母聖マリアの祭日

カトリックさいたま教区

司教 マリオ 山野内 倫昭